

## 留学生における非標準語との接触・使用・学習意識

—信州大学工学部留学生5名のケーススタディー—

合 津 美 穂

キーワード：非標準語、日本人学生、アコモデーション、理解と使用、社会言語学的能力の育成

### 要旨

留学生に対する日本語教育においては標準語教育が基本であるが、日本人学生が日常生活場面で使用している非標準語の教育を希望する声を留学生から聞くことがある。そこで信州大学工学部留学生5名を対象に非標準語との接触・使用・学習意識について面接調査を行い、ケーススタディ的に分析した。その結果、次のようなことが指摘できた。

- ①まわりの日本人学生を通じて非標準語とよく接触している。日本人学生は留学生に対しても非標準語を使用している。
- ②留学生も非標準語を習得し、使用している。
- ③非標準語の学習経験はほとんどないが、まわりの日本人へのアコモデーション上、非標準語の習得を望み、社会言語学的能力を日本語の授業で身につけたいと考えている。

以上の結果を日本語教育の立場から考察し、非標準語の教育を実施する際の課題を整理した。

### 1. はじめに

日本語の話しことばは変異に富んでいる。しかしながら、留学生に対する日本語教育において教育現場で教授される日本語は、一般に標準語が基本となっている。『『公的な場面で、学習者より目上の人間が話し相手になった場合でも、学習者の品位が（使用することばだけで）疑われることのないような、日本のどの地方でも用いることのできる日本語』の習得を目指すよう指導することが必要だ』<sup>1)</sup>と考えられているからである。

一方、生越（1993）が指摘するように、「留学生達からよく、日本人学生達が学生同士で話すとき、ぞんざいな表現を使うので、何を言っているかわからない、そのため、話の輪に入っていくにくい、という声を聞く」現実がある。信州大学留学生センター2001年度前期日本語研修コース修了生に対して、コース修了後10ヵ月後に行った追跡調査においても、「もっと勉強したかったこと・知りたかったこと」として「usual language such as student speak」「日常生活のよく使う言葉、たとえば：もっとめちゃくちゃ」といった回答や、「日本語研修コースへの提言や意見」として「生活化、若い化の言葉を勉強するほうがいいだと思います」などの回答が寄せられた<sup>2)</sup>。

こうした留学生の声は、留学生が日本語の教室以外において教室で学ぶ標準語とは異なる日本語に接触しているという現実、そして、実際の日常生活場面で日本人学生をはじめとするまわりの日本語母語話者が使用している日本語を、教育現場でも教えてほしいと考えていることを示していると思われる。

そこで、標準語にない言い方、いわゆる非標準語の中でも特に「大学生をはじめとする若者がくだけた場面で使用している表現」に対する留学生の接触・使用・学習意識の実態を把握するために、信州大学に在学する留学生5名を対象に調査を行った。本稿では、調査結果をケーススタディ的に分析し、日本語教育の立場から考察を加えてみたい。

近年、地方に居住する日本語学習者の増加と共に、日本語教育の現場において、標準語だけでなく、当該地域の住民が使用する非標準語—この場合は方言—を教授することの必要性が論じられるようになった。留学生が一日の生活の大半を過ごすのは、地域に存在する、「大学」という一社会集団である。本研究は、この社会の一大構成員である日本人学生が使用する日本語を、「くだけた場面で使用している標準語でない表現」という切り口から捉え、留学生の日本語教育について再考しようとするものである。こうした観点からの調査・研究は、管見の限り、見当たらない。調査対象者は5名と少ないが、今後、日本人学生とのコミュニケーションという観点から留学生の日本語教育を考えるための、パイロットスタディとして位置付けたい。

以下、本稿における「非標準語」とは、「標準語にない言い方で、若者がくだけた場面で使用している表現」を指す。

## 2. 調査の概要

### 2-1. 調査方法

今回の調査では、表1に示した計30語を調査語として選んだ。いずれも、現在、若者の間でよく使われている表現である。これらの非標準語一つ一つについて、接触状況・使用状況・学習意識に関する質問をし、それぞれ選択式で回答してもらった。

インフォーマントが使用していると答えた語のうち、「やっぱ」「じゃん」「きもい」「きしょい」「うざい」「ちがかった」「なにげに」「わかんない」「やばい」「超～」「マジ(で)」「っていうか」「ムカツク」「ぶっちゃけ」「ダメ元」「さむい」「おいしい」

調査語	使用例
やっぱ	やっぱ夏はビールだよな。
じゃん	これでいいじゃん。
きもい	あの人きもいよね。
きしょい	きしょいこと言わないで。
うざい	そんなにしつこくされると、ちょっとうざいよ。
ちがかった	山田さんだと思って声をかけたら、全然ちがかったよ。
なにげに	この問題、なにげに難しくない？
わかんない	そんなこと言われてもわかんないよ。
やばい	やばい、寝坊しちやつた！
超～	超暑いね。
メル友	メル友、何人くらいいる？
チャリ	チャリ使えば、10分くらいで着くよ。
コピる	ノート、コピってるね。
トラブる	親とトラブるの、もういやだよ。
サボる	次の授業、サボろうよ。
マジ(で)	マジで大変だったよ。
っていうか	っていうか、もうそろそろ時間じゃない？
ムカツク	さっきの言い方、ちょっとムカついたな。
俺	俺の席、取つていて。
タメロ	先生にタメロはいけないよ。
ブー太郎	うちのお兄ちゃん、まだブー太郎なんだよ。
ぶっちゃけ	ぶっちゃけ、あの人苦手なんだよね。
ダメ元	ダメ元でやってみようか。
汚ねえ	この犬汚ねえ。
見てえ	山田さんの素顔が見てえ。
おはよう	(午前中以外に使用する挨拶表現としての用法)
さむい	そのギャグ、さむいよ。
おいしい	これはおいしいバイトだ！
～ちやつた	財布、忘れちやつた。
全然～(肯定形)	今度の映画、思ってたより全然よかった。

表1 調査語一覧

「～かった」「全然～（肯定形）」については、実際にどのように使用しているかを確認するために、例文を作成してもらった。「メル友」「チャリ」「コピる」「トラブる」「ザボる」「俺」「タメ口」「プー太郎」については、意味をきちんと理解した上で使用しているかを確認するために、それぞれの語の意味を尋ねた。連母音アイが融合した「汚ねえ」「見てえ」については、標準語での言い方を答えてもらった。

この他、「日本人が使用している日本語」「学習している／した教科書の日本語」「外国人が学習・使用すべきだと考える日本語」について日頃感じていることや意見を、自由回答式で尋ねた。

調査は面接方式で、2002年8月に長野市内で行った。調査後、フォローアップインタビューを電話・Eメールによって行った。

## 2-2. インフォーマント

理工系の留学生は、一般に文科系の留学生に比べ、研究室単位で日本人教官・学生と共に行動することが多く、また、一日の大半を日本人学生と共に大学の中で過ごしていることから、日本人学生との接触場面が多いと考えられる。そこで今回の調査では、信州大学工学部<sup>3)</sup>の留学生5名をインフォーマントとして選んだ。表2はインフォーマントの属性をまとめたものである。

	A	B	C	D	E
性別	女性	男性	男性	女性	男性
年齢	26歳	26歳	26歳	24歳	28歳
学年	学部4年生	学部3年生	大学院博士課程1年生	大学院修士課程2年生	大学院修士課程1年生
滞日年数	5年6ヶ月	4年6ヶ月	2年4ヶ月	1年10ヶ月	1年4ヶ月
日本国内の居住歴	1997～1999 岡山県 1999～2000 松本市 2000～現在 長野市	1998～1999 東京都 1999～2000 千葉県 2000～2001 松本市 2001～現在 長野市	2000.4～2000.9 松本市 2000.10～現在 長野市	2000.10～2001.3 松本市 2000.4～現在 長野市	2001.4～2001.9 松本市 2001.10～現在 長野市
国籍	中国	台湾	マレーシア	タイ	ネパール
母語	中国語(洛陽方言)	中国語(台北國語)	客家語	タイ語	ネパール語
習得言語 (母語・日本語以外)	中国語(普通話)	客家語、閩南語、英語	広東語、福建語、マレー語 中国語(普通話)、英語	英語	ヒンディー語、英語
大学での使用言語	日本語	日本語	英語(研究上) 日本語(日常生活上)	日本語	英語(研究上) 日本語(日常生活上)
日本語学習の目的	日本での生活と研究のため	日本での生活と研究のため	日本での生活のため、趣味	日本での生活と研究のため	日本での生活のため
日本語学習歴	中国で半年間、週2回 1997～1999 日本語学校 1999～現在 信州大学	台湾で2ヶ月、週2回 1998～1999 日本語学校 1999～2000 大学別科 2000～現在 信州大学	マレーシアで2ヶ月、週5日 2000～現在 信州大学	タイで半年間、週1回 2000～現在 信州大学	2001～現在 信州大学
日本語能力試験 よく接する日本人	1級取得 学生、バイト先の人達	1級取得 学生、先生、大学事務員	未取得(中上級レベル) 研究室の学生	未取得(中上級レベル) 研究室の学生	未取得(中級レベル) 研究室の学生
日本語で話す機会	やや多い	やや少ない	やや多い	多い	やや多い

表2 インフォーマントの属性一覧

女性はAとDの2名、男性はB・C・Eの3名で、全員が20歳代である。

学年は、Aが学部4年生、Bが学部3年生、Cが博士課程1年生、Dが修士課程2年生、Eが修士課程1年生である。

滞日年数は、長い順に、Aが5年半、Bが4年半、Cが2年4ヶ月、Dが1年10ヶ月、Eが1年4ヶ月である。

日本国内の居住歴について。全員が、現在、工学部のある長野市に居住している。また、信州大学大学の共通教育センターや留学生センターのある松本市に住んだ経験がある。その他、Aは岡山県に2年間、Bは東京都と千葉県に各1年間の居住経験がある。

国籍、母語、および日本語と母語以外の習得言語は5人ともそれぞれ異なる。Aは中国

の洛陽の出身で、母語は中国語の官話方言（北方語）に分類される洛陽地域の方言、この他に中国語の普通話を習得している。Bは台湾出身の客家系台湾人であるが、母語は台北国語、習得言語は客家語・閩南語・英語である。Cはマレーシア出身の中国（客家）系マレーシア人で、母語は客家語である。その他、広東語・福建語・マレー語・中国語の普通話・英語を習得している。Dはタイ出身の中国系タイ人であるが、母語はタイ語、習得言語は英語である。Eはネパール出身で、母語はネパール語、習得言語はヒンディー語と英語である。

大学での使用言語は、A・B・Dは日本語が中心、CとEは論文の講読や作成などの研究面においては英語を、日本人学生とのコミュニケーションなどの場面においては日本語を主として使用している。

日本語学習の目的は、A・B・Dが日本での生活と研究のため、研究面では英語を使用しているというCとEは、日本での生活のためだと述べた。Cにとっては、日本語の学習は趣味でもあるという。

日本語学習歴について。E以外は2ヶ月から半年間、母国で日本語を学習した経験があるが、Eは日本に来てから初めて日本語を学習した。AとBは日本語学校で1～2年間、Bは更に大学の留学生別科で1年間学んだ経験がある。C・D・Eは、それぞれ時期は異なるが、信州大学留学生センターで半年間の日本語研修コースを受講している。

日本語能力は、AとBが日本語能力試験1級を取得している。C・D・Eは日本語能力試験を受験したことがないが、論者の判断では、CとDは中上級、Eは中級レベルである。

よく接する日本人、および日本語で話す機会について。Aは学生やバイト先の20～50歳代の男女と接することが多く、日本語で話す機会はやや多いという。Bが接する日本人は、学生・先生・大学事務員などの大学関係者が中心であるが、日本語を話す機会はあまり多くないそうである。C・D・Eがよく接する日本人は研究室の学生である。日本語で話す機会は、CとEはやや多い、Dは多いとのことである。いずれのインフォーマントにおいても、よく接する日本人は地域住民よりも大学の日本人学生である。

### 3. 結果と分析

以下、調査結果を分析し、「非標準語との接触状況」「非標準語の使用状況」「非標準語の学習状況」について記述する。インフォーマントの談話を引用する際には、紙幅の関係上、その大要を記す。

#### 3. 1 非標準語との接触状況

##### 3. 1. 1 聞いたことのある非標準語

まず、どのような非標準語を聞いたことがあるのかみていきたい。

表3は、全調査語30語について聞いたことがあるかどうか尋ねた結果を、度数が高い順に配列したものである。

聞いたことがある語は、合計26語。「メル友」「マジ(で)」「俺」「～ちゃった」「全然～(肯定)」の計5語は、全員が聞いたことがある。この他、聞いたことがあるとの回答を得た語は、度数が高い順に、「やっぱ」「じゃん」「やばい」「超～」「チャリ」「おはよう」(以上、度数4)、「おいしい」「きもい」「わかんない」「さぼる」「っていうか」(以上、度数3)、「うざい」「ちがかった」「ムカつく」「さむい」(以上、度数2)、「きしょい」「なにげに」「コピる」「タメ口」「汚ねえ」「見てえ」(以上、度数1)である。「トラブる」「プー太郎」「ぶっちゃけ」「ダメ元」の計4語は、全員が「聞いたことがない」あるいは「わからない」と回答した。

どのインフォーマントがこれらのことばをよく聞いているのか、確認しておきたい。

表3をみると、多い順に、B(22語)、A(19語)、D(18語)、C(13語)、E(7語)であることが分かる。滞日年数は、表2でみたように長い順にA(5年6ヶ月)、B(4年6ヶ月)、C(2年4ヶ月)、D(1年10ヶ月)、E(1年4ヶ月)である。滞日年数が最も短いEの聞いたことがある数が最も少ないが、今回の調査においては、滞日年数と非標準語の接触についての強い相関関係は、特に認められない。今回の結果で興味深いのは、滞日年数が1年10ヶ月のDが18語と、滞日歴が5年6ヶ月のAの19語に次いでいることである。

調査語に関連して、まわりの日本人学生が話していることばについて次のような情報も得た。

「まわりの日本人学生の中には、「わかんない」の他に、「わからん」や「わからへん」を使う人がいる。」(B)、「おめえ」や「うるせえ」を聞いたことがある。」(B)、「わからんねえ」も聞いたことがある。」(D)、「汚ねえ」は聞いたことがないが、「すげえ」は聞いたことがある。」(E)。

長野県は方言区画上、東部方言に位置づけられる。ところが、上記のように西部方言に広く認められる打ち消し表現「ーン」や「ーヘン」<sup>4)</sup>の使用が指摘されていることから、地元の長野県内からだけでなく、全国各地から集まっている信州大学の日本人学生<sup>5)</sup>のことばには、出身地域の方言の使用も認められるようである。表3の調査語「汚ねえ」「見てえ」の度は低い、実際は連母音の融合形もよく使用されている様子が窺われる。

Bの研究室では、入室時の挨拶は「おはよう」ではなく、「おっす」が使用されているそうである。これは男子学生の多い工学部の言語生活の一端を示すものであろう。

表3 聞いたことがありますか？(度数順)

	A	B	C	D	E	合計
メル友	○	○	○	○	○	5
マジ(で)	○	○	○	○	○	5
俺	○	○	○	○	○	5
～ちゃった	○	○	○	○	○	5
全然～(肯定)	○	○	○	○	○	5
やっぱ	○	○	○	○	△	4
じゃん	○	○	○	○	△	4
やばい	○	○	○	○	×	4
超～	○	○	○	○	×	4
チャリ	○	○	○	○	×	4
おはよう	○	×	○	○	○	4
おいしい	×	○	×	○	○	3
きもい	○	○	○	×	×	3
わかんない	○	○	×	○	△	3
さぼる	○	○	×	○	×	3
っていうか	○	○	×	○	×	3
うざい	×	○	×	○	×	2
ちがかった	○	×	×	○	×	2
ムカつく	○	○	×	×	×	2
さむい	○	○	×	×	×	2
きしょい	△	○	×	×	×	1
なにげに	×	○	×	×	×	1
コピる	×	×	×	○	△	1
タメ口	○	×	×	×	×	1
汚ねえ	△	○	×	×	×	1
見てえ	△	○	×	×	×	1
プー太郎	△	×	×	×	×	0
ぶっちゃけ	△	×	×	×	×	0
ダメ元	△	×	×	×	×	0
トラブる	×	×	×	×	×	0
合計	19	22	13	18	7	79

凡例 ○:ある  
 ×:ない  
 △:わからない

### 3. 1. 2 どんな人たちが使っているのを聞いたのか

次に、非標準語とどのように接触しているのか試してみよう。

表4は、聞いたことが

表4 どんな人たちが使っているのを聞きましたか？

あると回答された26語について、情報源を尋ねた結果である。

26語全体についてみると、「自分のまわりの日本人」との回答が度数72と最も多く、次がその約半数の度数48の「TV番組の中で」である。インフォマントは主としてまわりの日本人が使用している日本語を通じて、非標準語と接触しているようである。

	A			B			C			D			E			合計		
	T	日	外	T	日	外	T	日	外	T	日	外	T	日	外	T	日	外
メル友	○	○		○				○		○			○	○	○	4	3	0
マジ(で)	○	○		○	○	○		○		○	○			○	○	3	5	0
俺	○	○		○	○	○		○		○	○			○		3	5	1
～ちゃった	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○	4	5	4
全然～(肯定)	○	○		○	○	○		○		○	○			○		3	5	1
やっぱ		○		○				○		○						1	3	0
じゃん		○		○	○			○		○	○	○				2	4	1
やばい	○	○		○	○	○		○		○	○	○				3	4	2
超～	○	○	○	○	○	○		○		○	○					3	4	1
チャリ	○	○		○	○	○		○		○						2	4	1
おはよう	○	○						○		○	○	○		○		2	4	1
おいしい				○	○					○				○		1	3	0
きもち	○	○		○	○			○								2	3	0
わかんない	○	○		○	○					○	○					2	3	1
さぼる	○	○		○	○					○						2	3	0
っていうか	○	○			○					○						1	3	0
うざい				○	○					○						1	2	0
ちがかった		○								○	○	○				1	2	1
ムカつく	○	○	○	○	○	○										2	2	2
さむい	○	○	○	○												2	1	1
きしょい					○											0	1	0
なにげに				○												1	0	0
コピー										○						0	1	0
タメ口	○	○														1	1	0
汚ねえ				○	○											1	1	0
見てえ				○												1	0	0
合計	16	19	4	20	17	7	0	12	0	10	17	6	2	7	2	48	72	19

「～ちゃった」(度数4)、「やばい」、「ムカつく」(以上、度数

凡例 T:TV番組の中で  
日:自分のまわりの日本人  
外:自分のまわりの外国人  
○:ある

2)、「俺」、「全然～(肯定)」、「じゃん」、「超～」、「チャリ」、「おはよう」、「わかんない」、「ちがかった」、「さむい」(以上、度数1)については、「自分のまわりの外国人」も使っているとの回答を得た(合計度数19)。このことから、日本語母語話者だけでなく、外国人においても非標準語が使用されている実態が窺われる。

いくつかの語については、インフォマントの次のような具体的な気づきが報告された。

「さむい」はTVでよく聞く。(A)、「研究室の友達研究室に入ってくる時、午後でも夜でも「おはよう」と言う。(A)、「汚ねえ」は男の人だけでなく、若い女の人たちの中にも使う人がいる。(B)、「超～」は女子高生がよく使っている。「超カワイー」「超カッコイー」「超サムイ」「超サビシー」など。(D)。

また、「日本人が使用している日本語」に関して自由回答式で尋ねたところ、特に若い人々のことばについて、下のような意見が出された。

インフォマントは、若い人々のことばは他世代の人々のことばとは異なるようだと感じているようである。また、若い人々のことばは男女差が小さいこと、相手に応じてことばを使い分けている様子を観察していることがわかる。

【日本人が使用している日本語についてどう思いますか？】

- ・年輩の方の日本語はとてもやさしくて美しい日本語だと思うが、若者が使うことばは若々しくてかわいい感じがする。(A)
- ・若い人たちのことばには乱暴な使い方が多いと思う。学力が下がると共に、だんだん汚くなっているようだ。男性と女性のことばの差はあまり大きくないように思う。日本人学生のことばは、友達同士の時と先生と話す時とは全然違う。(B)
- ・最近、若い人たちの日本語は少し変わってしまった。いいことかどうか分からない。でも、その若い人たちが社会人になったら、きれいな日本語も話せるようになると思う。(D)
- ・若い人たちのことばはとてもくだけている。(E)

3. 1. 3 自分に対して使用されたことがあるか

こうした非標準語はインフォーマントに対しても使用されているのだろうか。

表5 は聞いたことがあると回答された26語について 表5 使用されたことがありますか？(度数順)

て、自分に対して使用されたことがあるかどうかを尋ねた結果である。

使用されたことがある語は、合計23語。聞いたことのある非標準語のうち、多くのものは、日本語母語話者間だけでなく、日本語学習者であるインフォーマントに対しても使用されているようである。「マジ(で)」「～ちゃった」「全然～(肯定)」「俺」は、全員が使用されたことがある。この他に、使用されたことがある語は、度数が高い順に、「俺」「じゃん」「やばい」「超～」「チャリ」「おはよう」(以上、度数4)、「メル友」「わかんない」「さぼる」(以上、度数3)、「やっぱ」「おいしい」「きもい」「っていうか」「ちがかった」(以上、度数2)、「ムカツク」「さむい」「コピる」「タメ口」「汚ねえ」「見てえ」(以上、度数1)である。

「うざい」「きしょい」「なにげに」(以上、度数0)は、聞いたことがあるが、自分に対して使用されたことはないと認識している。

	A	B	C	D	E	合計
マジ(で)	○	○	○	○	○	5
～ちゃった	○	○	○	○	○	5
全然～(肯定)	○	○	○	○	○	5
俺	×	○	○	○	○	4
じゃん	○	○	○	○		4
やばい	○	○	○	○		4
超～	○	○	○	○		4
チャリ	○	○	○	○		4
おはよう	○		○	○	○	4
メル友	○	×	○	×	○	3
わかんない	○	○		○		3
さぼる	○	○		○		3
やっぱ	×	×	○	○		2
おいしい		○		×	○	2
きもい	○	×	○			2
っていうか	○	○		×		2
ちがかった	○			○		2
ムカツク	○	×				1
さむい	○	×				1
コピる				○		1
タメ口	○					1
汚ねえ		○				1
見てえ		○				1
うざい		×		×		0
きしょい		×				0
なにげに		×				0
合計	17	13	12	14	7	63

凡例 ○:ある  
×:ない

どのインフォーマントが非標準語をよく使用されているのかについても確認しておこう。

表5をみると、多い順に、A(17語)、D(14語)、B(13語)、C(12語)、E(7語)であることが分かる。表3で確認したように、非標準語を最もよく聞いているのはBであるが、ここではAとDより僅かではあるが、低い値となった。Bは他のインフォーマントと異なり、TV番組を通じて非標準語と多く接していることが表4から窺われる。また、

表2でみたように、日常、Bは日本語で話す機会はあまり多くない。他のインフォーマントと比べ、日本人と接触すること自体が少ないようである。Bに対する非標準語の使用がそれ程多くないのは、こうした事情を反映しているのではないかと考えられる。

### 3. 1. 4 非標準語使用者に対する意識

さて、インフォーマントはこうした非標準語を使用する人々に対して、どのような意識をもっているのだろうか。

まず、日本人の非標準語使用に対する意識についてみていきたい。

表6は、「非標準語を日本人が自分や他の日本語学習者に対して使っているのを聞いたら、あなたはどのように感じますか」という質問に、選択式（複数回答可）で答えてもらった結果を度数の高い順に配列したものである。

表6 日本人の非標準語使用に対する意識（度数順）

	A	B	C	D	E	合計
仲良くなれそうだ	○	○	○	○	○	5
自分も使いたい			○	○	○	3
若い人だ		○		○	○	3
差別をしない人だ		○	○			2
現代的な人だ						0
優しい人だ						0
カッコいい						0
知的な人だ						0
カッコわるい						0
失礼な人だ						0
怖い人だ						0
仲良くなれそうもない						0
何とも思わない						0

インフォーマント全員が「仲良くなれそうだ」と感じると答えた。その他に、「自分も使いたい」(C・D・E)、「若い人だ」(B・D・E)、「差別をしない人だ」(B・C)との回答があった。

日本人が日本語学習者に対して非標準語を使用することについて、インフォーマントは肯定的な感情を持っているようである。

では、日本語学習者が使用者の場合はどうであろうか。

表7は、「非標準語を日本語学習者が使っているのを聞いたら、あなたはどのように感じますか」という質問に、選択式（複数回答可）で答えてもらった結果を度数の高い順に配列したものである。

表7 日本語学習者の非標準語使用に対する意識（度数順）

	A	B	C	D	E	合計
自分も使いたい			○		○	2
若い人だ	○			○		2
仲良くなれそうだ			○		○	2
日本語が上手だ			○		○	2
何とも思わない		○				1
現代的な人だ	○					1
失礼な人だ	○					1
差別をしない人だ						0
優しい人だ						0
カッコいい						0
知的な人だ						0
カッコわるい						0
怖い人だ						0
冷たい人だ						0
仲良くなれそうもない						0

「自分も使いたい」(C・E)、「若い人だ」(A・D)、「仲良くなれそうだ」(C・E)といった、日本人が使用者の場合と同様の回答の他に、「日本語が上手だ」(C・E)、「何とも思わない」(B)、「現代的な人だ」(A)、更には「失礼な人だ」(A)との回答もあった。

以上の結果から、日本語学習者が使用者の場合、日本人が使用者の場合と比べて多様な感情を抱いている様子が窺われる。

### 3. 2 非標準語の使用状況

#### 3. 2. 1 使ったことがある非標準語

まず、どのような非標準語を使ったことがあるのかみていきたい。

表8は、全調査語30語について使用したことがあるかどうかを尋ねた結果を、度数が高い順に配列したものである。

使ったことがある語は、合計18語。「～ちゃった」「全然～(肯定)」の2語は、インフォーマント全員が使ったことがある。この他、使ったことがあるとの回答を得た語は、度数が高い順に、「やばい」(度数4)、「じゃん」「超～」「チャリ」「マジ(で)」「おはよう」(以上、度数3)、「メル友」「さぼる」「さむい」(以上、度数2)、「やっぱ」「きもい」「ちがかった」「わかんない」「コピる」「俺」「ムカつく」(以上、度数1)である。

このうち「俺」を使用したことがあると回答したのはEである。Eは「研究室の友人が『俺』や『僕』を自分に対しても使うので、自分も同じように使ってみた。でも、自分自身、何だか変に思った。理由はわからないが、特に『僕』の発音は変な感じがした。そのため1、2回使ったくらいで、現在は使用していない。」と語った。

「プー太郎」「ぶっちゃけ」「ダメ元」「汚ねえ」「見てえ」「きしょい」「うざい」「なにげに」「トラブる」「っていうか」「タメロ」「おいしい」の計12語は、全員が使ったことがない、あるいはわからないと回答した。連母音の融合形はまわりの日本人によく使用されているものの、インフォーマント自身が使うことはないようである。

どのインフォーマントがこれらの非標準語をよく使っているのかについても確認しておこう。

表8をみると、多い順にD(11語)、B(10語)、C(9語)、A・E(いずれも6語)である。5人の中で最もよく非標準語を使用しているDは、滞日年数1年10ヶ月と短いほうであるが、表3でみたように、非標準語との接触率も比較的高い。これは、日本語を話す機会が多いというDが、日常生活において日本人学生と頻繁に接触していることを反映していると考えられる。一方、滞日年数が短く(1年4ヶ月)、非標準語との接触率が低いEとともに、滞日年数が長く(5年6ヶ月)、非標準語との接触率が高いAの使用が、5

表8 使ったことがありますか？(度数順)

	A	B	C	D	E	合計
～ちゃった	○	○	○	○	○	5
全然～(肯定)	○	○	○	○	○	5
やばい	○	○	○	○	×	4
じゃん	×	○	○	○	×	3
超～	×	○	○	○	×	3
チャリ	×	○	○	○	×	3
マジ(で)	×	○	×	○	○	3
おはよう	○	×	×	○	○	3
メル友	×	×	○	×	○	2
さぼる	○	○	×	×	×	2
さむい	○	○	×	×	×	2
やっぱ	×	×	○	×	×	1
きもい	×	×	○	×	×	1
ちがかった	×	×	×	○	×	1
わかんない	×	×	×	○	×	1
コピる	×	×	×	○	×	1
俺	×	×	×	×	○	1
ムカつく	×	○	×	×	×	1
プー太郎	△	×	×	×	×	0
ぶっちゃけ	△	×	×	×	×	0
ダメ元	△	×	×	×	×	0
汚ねえ	△	×	×	×	×	0
見てえ	△	×	×	×	×	0
きしょい	×	×	×	×	×	0
うざい	×	×	×	×	×	0
なにげに	×	×	×	×	×	0
トラブる	×	×	×	×	×	0
っていうか	×	×	×	×	×	0
タメロ	×	×	×	×	×	0
おいしい	×	×	×	×	×	0
合計	6	10	9	11	6	42

凡例	○:ある
	×:ない
	△:わからない



まず、使用相手についてみてみよう。Aは目上には使用せず、「友達の日本人・外国人」に対する使用のみである。Dも「友達の日本人・外国人」に対する使用が中心だが、「全然～（肯定）」だけは「目上の日本人・外国人」にも使っている。Cは外国人には使用せず、主として「友達の日本人」に対して使用しているが、「やばい」と「じゃん」は「目上の日本人」にも使用している。一方、BとEは、他のインフォーマントに比べて「目上の日本人・外国人」に対しても使用することがやや多いようである。

全体としてみると、「友達の日本人」に対する使用が度数42と最も多く、「友達の外国人」(度数18)、「目上の日本人」(度数10)、「目上の外国人」(度数4)と続く。

インタビューにおいて、非標準語の使用に関して「便利なことばやみんなが使っていることばは、友達との間では使っているが、先生や目上の人と話すときには使わないようにしている。」(C・D)、「なぜなら、先生と自分との間には上下関係があるので、使わない方がいいと思うから。」(C)、という意見があがった。

表11の結果と以上の談話から、インフォーマントは相手が目上か友達かによって非標準語を使い分けようと意識していることが窺える。

次に使用語に着目してみると、「マジ(で)」「やっぱ」「きもい」「ちがかった」「コピる」「俺」など、「友達の日本人」に対してのみ使用されている語もあれば、「～ちゃった」「全然～(肯定)」「やばい」「じゃん」「超～」「チャリ」「メル友」「さぼる」のように、「友達の日本人・外国人」だけでなく「目上の日本人」や「目上の外国人」にも使用されている語もあることがわかる。

相手に応じて非標準語を使い分けようと意識しているインフォーマントが目上に対しても使用している語は、非標準語と認識されていない可能性がある。

### 3. 2. 3 なぜ非標準語を使用する／しないのか

インフォーマント全員に使用されている「～ちゃった」「全然～(肯定)」のような語もあれば、聞いたことはあっても誰にも使用されていない「おいしい」「っていうか」「うざい」「汚ねえ」「見てえ」「なにげに」「きしょい」などの語もある。こうした非標準語の使用・不使用に関して、何らかの理由があるのだろうか。

まず、非標準語を使用する理由についてみていきたい。

表12は、非標準語

表12 非標準語を使う理由(度数順)

理由	A	B	C	D	E	合計
使いやすいから		○	○		○	3
相手と親しくなれそうだから	○		○	○		3
なんとなく		○		○		2
良いことばだと思うから					○	1
明るい人と思われたいから					○	1
日本語が上達したような気分になるから					○	1
現代的だから						0
よく意味はわからないが、みんなが使っているし、面白いから						0
「使いやすいから」 知的な人と思われたいから						0

(B・C・E)、「相手と親しくなれそうだから」(A・C・D)の他に、「なんとなく」(B・

D)、「良いことばだと思うから」「明るい人と思われたいから」「日本語が上達したような気分になるから」(いずれも E) との回答を得た。

選択肢以外の自由回答として、「便利だから。例えば「いいでしょう」より「いいじゃん」の方が言いやすい。」(C)、「自分の日本語にバラエティがほしい。自然な日本語を使いたい。」(E) という意見もあがった。

次に、非標準語を使わない理由についてみていこう。

表13は、非標準語を使用しない理由を選択式(複数回答可)

表13 非標準語を使わない理由(度数順)

で尋ねた結果を度数の高い順に配列したものである。

	A	B	C	D	E	合計
良いことばだと思わないから	○	○	○		○	4
相手に失礼だから	○	○			○	3
本当は使ってみたいが意味がわからないから			○	○	○	3
正しい日本語ではないから	○	○				2
なんとなく	○					1
すぐ使われなくなる言葉だから						0
日本語が下手だと思われそうだから						0
知的でないと思われそうだから						0
本当は使ってみたいが恥ずかしいから						0

「良いことばだと思わないから」(A・B・C・E)、「相手に失礼だから」(A・B・

E)、「正しい日本語ではないから」(A・B)といったことば自体の問題の他、「本当は使ってみたいが意味がわからないから」(C・D・E)、「なんとなく」(A) という回答もあった。

この他、選択肢以外の自由回答として、「面倒かもしれないが、縮約形などは使いたくない。正しく話したい。」(A)、「「やっぱ」という言い方は、ちょっと汚いと思うから使わない。」(B)、「正しくない日本語は使いたくないし、できるだけ使わないようにしている。なぜなら、上下関係が厳しい日本の社会において、学校の先生やアルバイト先の上司、学校の先輩に対して使ってしまうと、自分の立場が不利になってしまうと思うから。正しいことばとの使い分けは自分にとっては難しい。混ぜてしまうのが心配。」(B)、「「俺」は発音が嫌いだから。」(C)、「自分のまわりの日本人学生は、「飯食った」などのことばをよく使っているが、下品で乱暴な感じがする。だからこうしたことばは自分は使わない。」(C)、「誰に対して、どんなときに使っていていいかなど、使い方がわからないから」(E) という意見もあがった。

表8でAの非標準語の使用が少ないことを確認したが、その背景には、以上みてきたような理由が存在しているものと思われる。

### 3. 3. 非標準語の学習状況

#### 3. 3. 1 非標準語の学習経験

これまで非標準語との接触状況並びに使用状況をみてきたが、インフォーマントはこうした非標準語を日本語の授業で学習したことがあるのか確認しておきたい。

表14は、全調査語30語の学習経験について尋ねた結果を度数順に配列したものである。インフォーマントが学習したことがある語は、合計14語。「～ちゃった」は全員が学習した経験がある<sup>6)</sup>。この他に「習ったことがある」との回答を得た語は、「超～」「メル友」

「俺」「全然～（肯定）」（以上、度数2）、「やっぱ」「じゃん」「やばい」「ちゃり」「さぼる」「マジ（で）」「ムカつく」「タメ口」「おはよう」（以上、度数1）である。「～ちゃった」以外はいずれも度数が低いことから、日本語教育の現場で教えられることはあまりないようである。

5人のインフォーマントの中で、Aは非標準語を最も多く学習している。Aによると、日本語学校で勉強していたときに、教師が「聞いて理解できるように」と教えてくれたそうである。

インフォーマントはこれまで学習してきた教科書の日本語について、どのような意見を持っているのだろうか。以下は、自由回答式で尋ねた結果をまとめたものである。

談話からは、実際に話されていることばと教科書のことばとの差を感じ、戸惑った様子が読みとれる。しかし、「それは仕方がないと思う。なぜなら、最初は正しい日本語を勉強しないと、日本の社会にとけ込むのが難しくなると思うから。」

(B)、「教科書には誰に対してでも使えるようなことばを載せた方がいいと思う。」(C)、「現状でいいと思う」(D)と考え、教科書のことばを変えた方がいいという強い主張は特にみられない。

表14 習ったことがありますか（度数順）

	A	B	C	D	E	合計
～ちゃった	○	○	○	○	○	5
超～	○	×	×	○	×	2
メル友	×	×	○	×	○	2
俺	×	○	×	○	×	2
全然～（肯定）	○	×	×	○	△	2
やっぱ	○	×	×	△	×	1
じゃん	×	×	×	○	×	1
やばい	○	×	×	×	×	1
チャリ	×	×	○	×	×	1
さぼる	○	×	×	×	×	1
マジ（で）	○	×	×	×	×	1
ムカつく	○	×	×	×	×	1
タメ口	○	×	×	×	×	1
おはよう	○	×	×	×	×	1
汚ねえ	△	×	×	×	×	0
見てえ	△	×	×	×	×	0
さむい	△	×	×	×	×	0
きもい	×	×	×	×	×	0
きしょい	×	×	×	×	×	0
うざい	×	×	×	×	×	0
ちがかった	×	×	×	×	×	0
なにげに	×	×	×	×	×	0
わかんない	×	×	×	×	×	0
コピる	×	×	×	×	×	0
トラブる	×	×	×	×	×	0
っていうか	×	×	×	×	×	0
プー太郎	×	×	×	×	×	0
ぶっちゃん	×	×	×	×	×	0
ダメ元	×	×	×	×	×	0
おいしい	×	×	×	×	×	0
合計	10	2	3	5	2	22

凡例 ○:ある  
×:ない  
△:わからない

【学習している／学習した日本語についてどう思いますか？】

- ・日常生活で若者がよく使うことばに触れていないのが現状。教室で勉強している日本語と教室外で実際に使われている日本語との違いを感じたことはあるが、それは仕方がない。なぜなら、最初は正しい日本語を勉強しないと、日本の社会にとけ込むのが難しくなると思うから。(B)
- ・勉強したのはきれいな日本語だったが、実際に自分のまわりの日本人が話しているのは教科書で勉強したようなきれいな日本語ではなかった。勉強したのは「です・ます体」だったが、まわりの日本人は普通体でよく話しているため、なかなか聞き取れなかった。でも、授業では「です・ます体」をしっかり勉強した方がいいと思う。実生活で困ったことはそれほど長い期間ではなかった。ある程度時間が経つと、普通体に慣れる。若い人たちがよく使っていることばを教科書に載せる必要はないと思う。友達だから、分からなければ聞けばいいし、友達の間でしか使わないから。教科書には誰に対してでも使えるようなことばを載せた方がいいと思う。(C)
- ・現状でいいと思う。(D)
- ・丁寧な日本語が中心だった。くだけた日本語も勉強したが、実際に使われているもののうちのほんの少しだけだった。(E)

### 3. 3. 2 非標準語に対する学習意識

インフォーマントは非標準語を学習したいと思っているのだろうか。

表15は、非標準語を「日本語学校や大学の授業などで教えてほしいと思いますか」という質問に対する回答をまとめたものである。

表15 非標準語を授業で教えてほしいですか？

	A	B	C	D	E	合計
1. 思う		○		○	○	3
2. 思わない						0
3. どちらでもよい	○		○			2

結果は、「思う」が3人（B・D・E）、「思わない」が0人、「どちらでもよい」が2人（A・C）となった。

その理由について、「思う」と答えたB・D・Eは、「日常生活で通用する日本語を身につけたいから」（B）、「きれいなことばではないが、現在使われていることばなので、知っておくといいと思うから」（D）、「自分も使ってみたい。授業で習ったら、使い方がよくわかり、自信を持って使えるようになると思うから。」（E）と述べた。

一方、「どちらでもよい」と答えたAとCは、「自然に分かってくると思うから。」（A）、「こうしたことばを知っているかどうかは、あまり自分にとって重要じゃないと思うから。」（C）という意見であった。

自由回答式で尋ねた「外国人が学習・使用すべきだと考える日本語」については、次のような回答が得られた。

#### 【外国人が学習・使用すべきだと考える日本語】

- ・外国人はまず正しくきれいな日本語を使用すべきだと思う。その上で、日本人と友達になるために、日本人のようにくだけた日本語や省略した日本語を使うのがいいと思う。ただし、失礼なことばを使うのはすすめられない。（A）
- ・もちろん、現在、日本人がよく使っている日本語の勉強も必要だと思うが、文法的に正しい日本語を学習・使用した方がいいと思う。初級・中級のうちはまず文法的に正しい日本語を身につけて、ある程度、日本語が分かるようになってから特別な使い方や略語を勉強した方がいいと思う。日本の上下関係は相当厳しい（例えば会社など）。だから、丁寧なことばづかいの方が自分にとって好都合ではないかと思う。でも、もし日本語学習者が友達ことばを習得せずに、いつもきれいなことばだけを使っていたら、日本人と仲良くなるのはちょっと難しいかもしれない。自分のことばづかいが丁寧だということを相手に知ってもらえれば、友達との間で丁寧なことばで話しても問題ないと思っているが、初めて会った人には、わざと距離感を置いていると思われるかもしれない。（B）
- ・はじめはきれいで正しい日本語を勉強すべきだと思う。その上で、若い人達が使っていることばを勉強した方がいいと思う。基本的な文法をしっかり勉強してからなら、若い人達が使っているようなことばを勉強したり、話したりしてもいい。若い人達が話しているようなことばだけ勉強して、正しい文法を勉強しないのはよくないと思う。ことばによっては、あまり好きではないという人がいるかもしれない。きれいなことばだったら、誰にでも話せる。だから、きれいなことばを学習・使用した方がいいと思う。でも、もし日本語学習者が友達ことばを習得せずに、い

つもきれいなことばだけを使っていたら、日本人とは多分、なかなか仲良くなれないと思う。

(C)

・毎日の生活ができる、ニュースが理解できる、日本人とコミュニケーションができるような日本語を勉強することが大事だと思う。きれいな日本語が話せることも大事だと思う。(D)

・実生活で使われているような話しことばを勉強するべきだと思う。調査語のようなことばでも、どんな相手に使ってもいいかなど、使い方が分かっているのならいい。もし心配なら使わない方がいいと思う。(E)

何人かのインフォーマントが談話の中で述べている「正しい日本語」「きれいな日本語」とは、教科書で教授されるような標準語を指していると思われる。日本人と友達になるには標準的な日本語では難しいのではないかと思い、日本人同士が親しい仲間うちで使用しているような非標準語の使用が、アコモデーション上、必要となると考えているようである。これは、表12「非標準語を使う理由」でみた「相手と親しくなれそうだから」という回答とも重なっている。

表15の結果と談話から、インフォーマントの非標準語に対する学習意識は、(1) まずは標準的な日本語を学ぶ必要がある。その上で、(2) まわりの日本人と親しい友人関係を結ぶために、非標準語も習得するとよい。そのためには(3) 標準語と非標準語を相手に応じて使い分けができるよう、社会言語学的能力を日本語の授業で身につけたいと考えている、と集約することができる。

#### 4. まとめ ー日本語教育の立場からー

以上、調査結果を分析し、インフォーマントの「非標準語との接触状況」「非標準語の使用状況」「非標準語の学習状況」についてみてきた。まとめると、次のようになる。

①まわりの日本人学生を通じて非標準語とよく接触している。日本人学生は留学生に対しても非標準語を使用している。

②留学生も非標準語を習得し、使用している。

③非標準語の学習経験はほとんどないが、まわりの日本人へのアコモデーション上、非標準語の習得を望み、社会言語学的能力を日本語の授業で身につけたいと考えている。

本稿のまとめとして、日本語教育の立場から考察を加えてみたい。

今回の調査から、留学生への非標準語教育は、「理解」だけでなく、「使用」の面からも考えていく必要があることがわかった。実際に非標準語教育を実施するためには、次の3点について慎重に検討しなければならないだろう。

1つ目は、何を教えるか、ということである。若者がくだけた場面で使用している表現は、盛衰が激しいという特徴を持つ。留学生のまわりの日本人学生が使用している非標準語の実態を的確に把握することが不可欠である。そして、教育の対象とするためには、理解語・使用語といった観点からも整理する必要がある。また、調査結果にもみられたよう

に、自然習得によっても習得可能なものもある。時間的制約のある教育現場で取り上げる必要があるのはどんなことばか、更にそれをどのような順番で教えるのかについても十分に検討しなければならない。

2つ目は、留学生の非標準語使用に対する日本人の意識・評価の問題である。インフォマントは日本人学生へのアコモデーション上、非標準語の使用が必要になると考えているが、相手側の日本人は留学生の非標準語使用をどのように受けとめるのだろうか。方言教育に関する議論において、真田（1992）は「外国人に限らず他郷の人とわかる人がその土地の方言をペラペラとしゃべることについて、必ずしも好感をもって迎え入れる人ばかりではないのではないか。そこには様々な感情が屈折した微妙な心理が顔を出すこともあるようである。」と述べている。この指摘は、方言だけでなく、本稿で対象としているような若者がくだけた場面で使用している表現を外国人が使用することに関しても、考慮すべきことであると思われる。

3つ目は、非標準語教育を実施する際には、社会言語学的能力の育成に重点をおく必要があるということである。非標準語は標準語と同等の社会的評価を得ていない。「ことばの乱れ」として非難の対象となることばも含んでいる。こうしたことばの使用に際し、社会言語学的なルール違反を犯した場合には、人格的な評価（マイナス評価）につながる危険性があるからである。非標準語の使用にはリスクが伴うことについても、学習者に伝えておく必要がある。非標準語の教育には、教える側にも慎重な態度が求められるのである。

## 5. おわりに

本稿では、留学生への面接調査で得られたデータにもとづき、留学生における非標準語との接触・使用・学習意識の一端を記述した。そして、日本語教育の立場から考察を加え、非標準語の教育を実施する際の課題を整理した。

今後は留学生のまわりの日本人学生に調査対象を広げ、日本人学生の言語使用の実態、留学生の非標準語使用に対する意識・評価についても明らかにしていきたい。

付記：快く調査にご協力くださった留学生の皆様に心よりお礼申し上げます。本調査は、論者が聴講した平成14年度東京都立大学人文学部開講科目「日本語教育学演習第二・特殊研究第二」（ダニエル・ロング助教担当）で行った調査の一環である。ご指導を賜りましたダニエル・ロング先生、並びに、授業中有益なコメントをくださった受講生の皆さんに、記して感謝申し上げます。

## 注

- 1) 備前（1993）p.89。
- 2) 2002年7月14日に実施したアンケート調査結果より、誤字・脱字等にも手を加えずそのまま抜粋した。この追跡調査は、日本語研修コースを担当している信州大学留学生センター教官6名が協力して行ったものである。
- 3) 『信州大学留学生センター年報』第2号（2002年発行）によると、2001年5月1日現在の信州大学全

学の留学生数は336名、そのうち工学部に在籍する留学生は82名である。なお、工学部の在籍生数は、2000年5月1日現在、1,663人である（『信州大学案内 2001年版』信州大学学生部入試課 参照）。

- 4) 長野県は東西両方言対立の指標の一つである打ち消し表現の境界線が、北安曇・南安曇・東筑摩・諏訪を走っていることが知られている（牛山（1969）所収「語法から見た東西方言境界線」参照）。馬瀬（1992）によれば、長野県は北信方言・東信方言・中信方言・南信方言・奥信濃方言の5つの方言区画に分かれる。工学部のある長野市は北信方言に、インフォーマントが半年から1年居住した松本市は中信方言に属する。東西両方言対立の指標は、北信方言・東信方言・奥信濃方言では一般に東日本の特徴が、中信方言・南信方言では西日本方言の特徴も現れる。打ち消し表現についてみると、松本平・周辺地方や諏訪地方では東部方言の「ーナイ」類と共に西部方言の特徴を示す「ーン」も時に用いられ、上伊那を南部に行くに従い、「ーナイ」類と「ーン」類が混用されるという。
- 5) 2000年度出身高校所在都道府県別の入学者数を見ると、信州大学全入学者数1,989名中、長野県出身者が418名と最も多く、次いで愛知県271名、静岡県111名、大阪府94名、兵庫県90名、岐阜県68名と続く。地区別に見ると、北海道32名、東北57名、関東甲信越771名、東海北陸589名、近畿314名、中国・四国115名、九州・沖縄97名、その他（大検等）14名である（『信州大学案内 2001年版』信州大学学生部入試課 参照）。
- 6) C・D・Eが日本語研修コースや日本語補講において学習したことのある日本語教材、(財)海外技術者研修協会編著（2000）『新日本語の中級』スリーエーネットワークには、「～てしまう」→「～ちゃう」をはじめとする縮約形の例がいくつか提出されている（pp.280-281）。本調査語の一つである「わかかない」に関する「『ーらない』『ーれない』『ーりない』→『ーんない』」もあげられているが、表14にみるよう、C・D・Eは「わかかない」は習ったことがないと回答している。

#### 参考文献

- 井上 史雄 1994 『方言学の新天地』明治書院  
井上 史雄 1998 『日本語ウォッチング』岩波新書  
井上 史雄・鎌水兼貴編著 2002 『辞書 <新しい日本語>』東洋書林  
牛山 初男 1969 『東西方言の境界』自家版  
生越 直樹 1991 「日本語教育と方言」徳川宗賢・真田信治編『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社  
真田 信治 1992 「方言の状況と日本語教育」『日本語教育』76号  
渋谷 勝己 1992 「社会言語学的にみた日本語学習者の方言能力」『日本語教育』76号  
永瀬 治郎 1999 「語の盛衰—キャンパス言葉の寿命—」『日本語学』第18巻第10号 明治書院  
長野県編・馬瀬良雄著 1992 『長野県史 方言編』長野県史刊行会  
浜田 麻里 2001 「第二言語の習得」ロング, ダニエル・中井精一・宮治弘明編『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社  
伴 紀子 1985 「『生活語』の教育上の配慮」『日本語教育』56号  
備前 徹 1993 「第Ⅱ部 日本語教育における方言」国立国語研究所編『日本語教育指導参考書20 方言と日本語教育』大蔵省印刷局  
馬瀬 良雄 1971 『信州の方言』 第一法規  
ロング, ダニエル 1992 「日本語教育における『方言教育』の問題点」『日本語教育』76号

